

なんでやねん

発行責任者 倉橋 忠



No. 1 6

社会科でつける学力と評価について

観点別評価の「ABC」について

中間考査が終わると、いよいよ「通知表」の「評価」が気になり始めます。そこで、私(倉橋)のつける観点別評価の「ABC」について説明しておきます。

「通知表の観点別評価」には、「知識・理解」、「資料活用技能」、「社会的思考・判断・表現」、「社会事象に対する関心・意欲・態度」の4観点があります。

定期考査の問題は観点別に作成します。そして観点別に集計し正解率でABC判定をします(ABCの基準は兵庫県全体で決められています)。ただ、観点によっては、定期考査の正解率だけではなく、ノートなどと

観点別評価の基準	
A	評価項目の正解率が80%以上の場合
B	評価項目の正解率が79%～50%の場合
C	評価項目の正解率が49%以下の場合

授業中の「発表内容(間違っている場合でもOK)」を考慮して、最終的な評価をします。

「記憶する勉強」だけでは、社会科の学力は伸びない

基本用語(キーワード)を暗記するだけの勉強ばかりしていても、実は学力はあまり伸びません。ところが、発展性の学力を高める練習をすると、スポーツで言えば練習試合をするようなもので、厳しく苦しいけど効果的な練習になります。別の言い方をすると、練習試合には、基本練習では身につかない競技力を高めるような効果が期待できます。このことは、スポーツをしている人なら理解できるでしょう。

記憶するために何度も繰り返すことを心理学で「リハーサル」と言います。また、学んだキーワードを使って、解決方法を発見することが困難な課題に向き合うと、知らず知らずの内にキーワードを覚えてしまいます。友達と議論をしたり課題作文を書いたりすることがリハーサルをすることになるんでしょう。私がこれまでに指導してきた中学生達は、議論や課題作文に取り組んでいる内に基礎学力が上昇していました。ぜひ、GLTや課題作文に挑戦して、発展性の学力も身につけてください。

観点の意味

「知識・理解」の「知識」は、社会事象(事実として具体的に知ることができる社会的な事柄や出来事のこと)を知ることです。学力的には、正確に記憶することが求められます。一方、「理解」は、社会事象の内容を覚えるだけでなく、キーワード

(社会科の専門用語)を用いて、その事象の原因や結果との関係を説明したり、その事象の影響などを説明できることを言います。したがって、ここまでの学習に留まっていると「暗記教科」だと言い切れるのかも知れません。それでも、「理解」しておかなくてはなりませんから、「丸暗記」では高い評価は望めないことになります。

「資料活用技能」に言う「資料」とは、社会事象を整理したり伝えたりする際に利用される、説明文書、古文書、統計資料、グラフ、地図、図版・写真などをさします。そして、これらの「資料」から、社会事象の意味や特徴を説明できる「情報」を読み取ることができたり、グラフを作成したり、略地図で表すなど、一定の情報から「資料」を作成することができる能力を「資料活用技能」と言います。この「資料活用技能」を高めるためには、数学的な素養が必要な場合や、説明文を読み取る国語力を練習することなどが重要な鍵を握ることがあります。

「社会的思考・判断・表現」は、様々な社会事象の中の課題を解決するために必要な学力です。その内容は「応用する・分析する・まとめる・評価する」などの力です(詳細は別の機会に説明します)。思考・判断は「知識・技能を活用して」行います。だから「思考・判断・表現」は、「活用する力」とも言われます。ここで言う「表現」とは、課題の解決方法(結論)を導くために思考・判断した筋道を、比較的短い文で説明したり、プレゼンテーションなどができるような学力状態のことです。

なお、「社会的思考・判断・表現」は、中学生が社会問題の中から自ら課題を発見するのではなく、解決すべき課題として「提示された課題」に取り組む程度の学力状態であると考えられます。

「社会事象に対する関心・意欲・態度」は、最も高度な学力状態です。社会事象の多くは、たいていの場合、何らかの意志決定あるいは価値判断を要求します。現実の社会事象では、問題の所在がそもそものような仕組みになっているのか、何を解決すれば良いのかさえ分からないことが多くあります。そのような場面では、自分で課題を設定することができ、意志決定や価値判断を、客観的・合理的で、かつ公正な過程を経て導き出すことができる。社会科学的な学力(態度)が必要です。

たとえば、仕事に就くときには、その職業を歴史的事実としてとらえ、将来でもその職業が成り立つのか、発展する可能性があるのかを思考し、判断しなければなりません。生きていくためには、その「課題」に、自分の「結論」を出さなければなりません。そのような「事実」と「結論」の間で思考される方略(方法)が、社会科の評価における(社会科学的)「態度」であると、私は考えています。「関心・意欲・態度」の学力が育つようになると「社会科の学力」が「生きる力」となるでしょう。